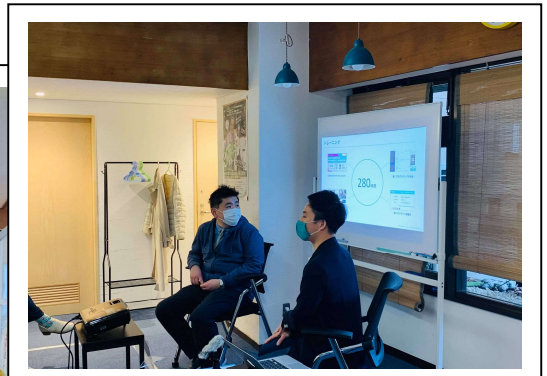


「としま・まちごと福祉支援プロジェクト」イベント（2021年4月開催）報告書

4月16日（日）、に行われました「としま・まちごと福祉支援プロジェクト」の市民参加イベントのご報告です。前日までの予報が外れてよい天候に恵まれたためか当日参加も何人かおられ、立ち見の方が出るほどでした。

テーマは「共生ハウス西池袋の住人と、共生社会づくりについて語ろう」。前半は、山田邦生氏が2020年1月にリリースしたひきこもり当事者向け在宅支援サービス「COMOLY（コモリー）」の活動についてお話いただきました。ひきこもりになった幼馴染と再会したのをきっかけに、ひきこもり問題に関心をもち、その友人と共にサービスをつくりあげてきたのだそうです。1年、2年と急がずに、時間をかけて友によりそい、今では仕事のパートナーになるまでとなったというお話を聞くことができました。後半は、ひきこもりコンシェルジュという肩書きをもつ大橋史信氏。自身のつらい幼少体験から、ピアサポーターを目指すまでの道のりを語り、「社会はマイノリティに対して“監視”ではなく、“関心”をもってほしい」と話を締めくくりました。



▲左：大橋さん 右：山田さん

今年に入って2人が「共生ハウス西池袋」に住み始め、ここ数ヶ月間の暮らしの変化について、数日前に撮ったばかりのハウスのスナップ写真を見ながら、木造戸建てに住んでみて、親の家のありがたさに気付いたという大橋さん。「夜中に廊下で倒れた大橋さんを、山田さんが助けたってホント?!」ハウスのお風呂にゆっくりつかるとぐっすり眠れる。それが仕事の活力という山田さん。普段は特に顔を合わせず、玄関の靴のあるなしでざっくり人の気配を感じている 等々のエピソードを語っていただきました。

参加者の声 「共生ハウスの暮らしのようすがわかり興味を持った」「どのような収支で共生ハウスをつくったのか詳しく知りたい」「一般社団法人コミュニティネットワーク協会の活動に興味を持った」「コミュニティに所属することの大切さ、つながりの大切さを感じた」

共生ハウスにはもうひとり、80代の女性も入居しています。世代も、暮らしのリズムも、何もかもバラバラな住人が不思議な距離感で暮らしている様子を垣間見ることができました。